当たり前の「水」を疑ってみたら

沖縄県　アミークスインターナショナル中学校　一年　渡慶次　美沙

皆さんは、朝起きてから夜寝るまで、一日に何度水を使いますか。

私は朝起きれば顔を洗い、夜になればお風呂に入ります。蛇口をひねれば透明できれいな水が勢いよく流れ出す。そんな毎日を、私は当たり前のことだと思っていました。空気と同じように、いつでもそこにあるものだと信じていたのです。

けれど、ある時ふと考えてみました。「もしも、この世界から水が全部消えてしまったら、どうなるのだろう。」と。

私の頭の中で想像してみたその世界は、とても恐ろしいものでした。のどがカラカラに乾いて目が覚め、ふらふらと洗面所へ向かいます。でも、蛇口をいくらひねってみても、何も起こりません。ただむなしく、蛇口がくるくると回るだけです。

窓の外を見ても、鳥の声も風の音も聞こえません。太陽が照りつけて、空気はのどが痛くなるほど乾ききっています。木はどれも枯れかけていて、地面はあちこちひび割れていました。生き物の気配が全くない、しんとした静けさが、何よりも怖いと感じました。

そんな想像を振り払うように、私は慌てて風呂場へ行って、蛇口を開けました。手のひらに冷たい水が当たったとき、ホッとして安心しました。水の冷たさを感じて、水は生きるために絶対に必要なものなんだ、と強く思いました。

このことをきっかけに、私は「この水はどこから来ているのかな？」と疑問に思い、調べてみることにしました。

そこで初めて知ったのは、沖縄の水は、主に「やんばる」という北部にある幾つかのダムが支えてくれているということです。福地ダム、大保ダム、羽地ダム等、今まで聞いたことはあっても、自分の生活に関係があるなんて思ったこともありませんでした。

もっと詳しく調べてみると、沖縄ならではの理由も見つかりました。沖縄本島の地面は、主に「石灰岩」という岩でできています。この岩は水を通しやすいため、雨が降ってもすぐに地面の奥深くへとしみ込んでしまいます。だから、他の県のように地下水として貯めておくのがとても難しいのだそうです。

だからこそ、北部のダムが少ない雨を一生懸命にせき止めて、そこから長い長い水道管を通して、私たちの家まで届けてくれているのです。もし北部のダムから水が無くなれば、沖縄全体が、私があの時想像した世界のように、一瞬で大変なことになってしまいます。

今までの私は、地球の七割は水に覆われているのだから、無くなるわけがないと思っていました。でも、そのほとんどは塩辛い海水です。飲むこともできないし、作物を育てることも、体を洗うこともできません。本当に使える「真水」は、全体のたった二パーセントくらいしかありません。私たちが実際に使える水は、地球にある水の中の、ほんのわずかな宝物なのです。

毎日、当たり前のように蛇口から流れてくる水。それは、遠いやんばるの森から長い道のりを旅して、いくつもの工程を経て、きれいに浄化されて、ようやく私の目の前に届いたものでした。それは決して、当たり前のことではありません。

今の私は、シャワーを浴びる時間を短くしたり、歯を磨く間は蛇口を閉めたりするようにしています。一つ一つは小さなことかもしれません。でも私は、一滴一滴の水が、この島が一生懸命に守ってくれた大切な命なんだということを、ずっと忘れたくないのです。私には、それを無駄にする権利なんてないのだから。